

『現代世界を見る眼』

自分の書いた書物について語ることは何だか気恥しい気がしてならない。しかし、過去の仕事を自分なりに整理することでもあると考へ直してペンを走らせることにしました。

私は、国際問題をユーゴスラヴィアをキー・ポイントとして、社会主義圏を中心に見て来ました。時々、事件や動きについて、時には、歴史的に、時には構造的に分析して来ました。

しかし、米ソを始め、国際的な出来事は、益々、相互依存を深めている今日、個別的に孤立して見ている見誤る事になり、どうしても、総合的に見なければならなくなりました。そこで、第二次大戦後の世界の動きをグローバル（地球的視野）に立って見る必要を痛感して、勇気を出して、私なりにまとめたのが本書であります。

その意味では、本書は私にとって、今迄の個別的な研究の底を流れている糸を追ったつもりですが、はたして、初期の目的通りに成

功したか自信がありません。しかし、この様な仕事は、一度はやっておかなければ、次の段階に登れないと思つて大胆にも戦後世界を概観した本書を書いた次第です。

国際問題は、軍事と深い関係にあり、多くの事件が各国の利害と結びついており、私達に明らかにならない事が多いのが現実です。しかし、それらが組合わされ、積重ねられて世界は動いています。

本書を書くにあつて、一番苦労した事は出来るだけ客観的な資料を探すことでした。

この事は、国際問題を正しく理解するため、ぜひ努力しなければならぬ事です。そのため、読者の理解の便を考え、本書では、多くの資料を取り入れたり、漫画家の協力を得て、まんがを挿入しましたが、本書は、どこまでも研究書としての姿勢を保っております。

また、国際情勢は常に動いており、その動いている現実を正確に理解することが、私達国際問題を研究している研究者に課せられた任務であると私は常に考えております。そう致しますと、或る一定の時期に通用した理論が、次の時期には通用しなくなることがしばしば起ります。

例えば、米ソだけを考えても第二次世界大戦中の同盟があつたかと思へば、数年にして相対立する冷戦時代を迎えました。ところがスターリンの死、フルシチョフが台頭するとデタント（緊張緩和）になりました。こうなると、反ファシズム統一戦線論や戦争不可避論が通用しなくなります。また中ソ対立が激化しますと今迄のプロレタリア国際主義は何処かに行つてしまつて、古い国益論が再建されます。

この様に、国際情勢は各国の利益によって動かされており、それを通じて、その底に流れている歴史の動きを常に追ひながら、将来の世界像を考えていると、時々、国際問題についての理論の空しさを感じることがあります。

本書を書き終えた今日、この空しさを乗り越えて、グローバルな視野から、世界を理解し、見通せる理論の再構築を私なりに努力しなければと痛感して居ります。

（たかや さだくに 社会学部教授）

昭和六十年十月 ミネルヴァ書房発行
本文二五〇頁 二、五〇〇円